■フォトエッセイ■

バンドン
―ジャカルタ新興層の週末の過ごし方―

写真・文　磯野生茂
Ikumo Isono

バンドン駅

バンドンは、一九五五年にアジア・アフリカ会議（バンドン会議）が開かれた場所として、また当地の名を冠する工科大学のレベルの高さから日本でもよく知られている。オランダ統治時代からの歴史を有する街であると同時に、バンドンはジャカルタの富裕層・新興層が週末を過ごす場所として、独自の進化を続けている。本稿では、筆者の身近にいるインドネシア人から聞いた例を基に、彼らジャカルタ新興層がバンドンでどのように週末を過ごすのか紹介する。

まず、バンドンの地理的位置を確認しよう。バンドンはジャカルタから南東に高速道路で一三〇キロ（ジャカルタ・チャワンからバンドン・パストゥールまで）、金曜日の夜ないし土曜の朝にジャカルタを出て、一～二泊し、日曜の夜帰ってくるには無理のない距離である。周りを山に囲まれた高地にあり、ジャカルタが年間を通じて最高気温三四度、最低気温二六度程度でエアコンが手放せないのに対し、バンドンは最高気温が三〇度前後、最低気温が二〇度以下となり、過ごしやすい。夜はエアコンを止め窓を閉めないと、寒く感じるほどである。

ジャカルタ市民がバンドンで過ごす場所として、まず、定番のトランススタジオ・バンドンが挙げられる。二〇一一年六月にオープンしたトランススタジオは、二〇のアトラクションを有する室内型の本格的テーマ

トランススタジオ・バンドンの特撮効果アクションショーに並ぶ人たち

トランススタジオ・バンドンは室内型のテーマパークである

トランススタジオ・バンドンの入り口付近

パークである。入場料は平日一五万ルピア（一四〇〇円）、土日祝日が二五万ルピア、VIPアクセスというアトラクションの優先入場レーンを使える権利を得るには追加で二五万ルピア必要である。大人も子どもも同料金であり、たとえば家族四人で週末に来ると、VIPアクセスがなくても一〇〇万ルピア、約九四〇〇円という金額になる。二〇一四年のバンドン市の最低賃金が月二〇〇万ルピアであることを考えると、このテーマパークのターゲット層が富裕層・新興層であることがわかろう。ローラーコースター、テレビ番組撮影のセットを模したものを体験できるコーナー、科学実験コーナー、ボートを模した乗り物が高傾斜を駆け下り水面にダイブするもの、乗り物に乗ってインドネシアの各州の風習を見てまわるもの、パレード、特殊効果のアクションショーなど、著名な海外テーマパークに引けを取らない体験を提供している。

バンドンの北部に位置するレクリエーションエリア、ドゥスンバンブーが次の場所である。入場料は家族四人の場合、五万五〇〇〇ルピア（五二〇円、駐車料金込み）。レストラン、ハイキングコース、ロッジなどがあり、美しい景色に囲まれているため、小さな子ども連れの家族だけでなくデートスポットとしても利用される。子どもたちはレストラン横のプレイエリアで遊び、両親がスマートフォ

ドゥスンバンブー

ドゥスンバンブーのプレイエリアで遊ぶ子どもたち

ドゥスンバンブーのレストラン

カフェ、ミスビープロビドーレの室内

パドマホテルのロビー

ラカメラコーヒーのラテ

パドマホテルのレストラン

ミスビープロビドーレは一軒家タイプのカフェ

パドマホテルは緑に囲まれている

ンや一眼レフで彼らの写真を撮っていた。また若いカップルも、iPhoneやAndroidといったスマートフォンに自撮り用のエクステンションスティック（セルフィースティック）をつけて思い思いの場所で自分たちを撮影していた。

パドマホテルの朝食ブッフェも、美しい景色を楽しむことができる。バンドン中心部から七キロほど北にあるこのホテルは、丘陵の中程にあり、ホテル自体が緑に囲まれている。朝はバンドン中心部よりもさらに気温が低くなることから、景色を一望できるレストランで、冷房に頼らない涼しさを得ることができる。バンドン市ないし郊外に週末用の住居がない場合、このホテルに宿泊するのもひとつの選択肢となる。

バンドンにはまた多くのおしゃれなカフェがあり、静かな時間を過ごすことができる。パドマホテルからほど近いミスビープロビドーレはその代表格のひとつで、外観、内装ともに理想的な一軒家で寛いでいるような感覚になれる。また、バンドン中心部に近いラカメラコーヒーは、質の高いコーヒーやラテを提供する。

バンドン郊外の不動産巡りも人気だという。不動産価格の高まりを受けて、中間層以上の層は不動産投資への選好が強い。ジャカルタ新興層としては、投資目的と週末の拠点の両方を満たせる、バンドン郊外でジャカルタに近い方面の高速道路出口付近の物件が候補

バンドン市内での渋滞

コタバルパラヒャンガンの一角。一軒家の価格は 2000 万円超

バンドン郊外ではいたるところで住宅建設が行われている

のひとつとなる。実際、バンドン郊外には大規模な住宅開発プロジェクトが複数存在する。たとえば、コタバルパラヒャンガンは一二五〇ヘクタールにおよぶ大規模開発プロジェクトで、道路、住宅、商業施設や病院などその他生活基盤、レクリエーション施設を一体開発することで、古く比較的貧しい住宅群と新しい住宅との混在や狭い幹線道路に車が殺到して一日中渋滞するといったインドネシアによくみられる景色から隔絶した生活環境を提供する。一方、インドネシア中央銀行が二〇一三年以降、特に二軒目以降の住宅ローン設定に対し高い自己資金比率を設定したこと、また不動産価格が手の届かないレベルまで上昇したため（たとえば写真の一軒家が二〇〇〇万円以上など）、以前ほどの活況はみられず、開発のスピードもやや落ちている印象だという。

以上、日本人向けのバンドンの観光名所としてはあまり挙げられないところも含めいくつか紹介したが、意見を聞いてまわったインドネシア人から最後に念を押されたのは、無理にスケジュールを押し込めすぎないことである。バンドンは道路整備が遅れていて中心部はジャカルタ以上に渋滞が酷く、土日はそれが激化する。また、ジャカルタとバンドンの行き帰りも、ジャカルタ～プルワカルタ間は工業地帯のため高速道路も頻繁に渋滞し、深夜なら片道二時間で行けるところが、運が悪い場合は六時間かかってしまうこともある。ジャカルタ・バンドン間の高速鉄道は、完成の暁には三七分で両都市を結ぶとされているが、ＪＩＣＡ協力による開発事業準備調査のフェーズＩが二〇一五年三月までの予定で行われており、実現までは時間を要する。多くをまわるのでなく、ひとつの場所で長く時間を過ごすことが望ましい。

いその　いくも／日本貿易振興機構アジア経済研究所　経済統合研究グループ

2005 年入所。2011 年～ 2013 年国際機関東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA、ジャカルタ）に出向。2014 年帰任。専門は空間経済学、東アジアの経済統合、特にコネクティビティ分野。